指輪物語を知っていますか？

情報工学科　篠山　学

１９４０年頃に J・R・R・トールキンによって書かれたファンタジーです。２００１年には映画化もされました。言語学者でもあるトールキンが言語まで作って書いた壮大な物語です。読めばなにかが変わります。なにせ，ぜんぜん関係のないプログラムの本に参考文献としてインスピレーションが得られると紹介されているくらい。こんな本は他にないでしょう。

私は指輪物語が大好きです。正確には，後日談やサイドストーリー、くらしているひとびとの生活などを空想するのが好きです。メイン以外の人々がどんな思いでどのように暮らしているのか，どんな慣習があるのかなどが気になります。

例えば、のろしをあげるシーン。あ、のろしって分かります？でっかいたいまつを燃やして遠くに緊急事態を知らせるための通信手段です。より遠くへ知らせるために，のろしを組み合わせることによってリレーすることもできます。そのシーンでは山の頂上（富士山の山頂のようなところ）に次々にのろしが上がっていくわけですが，当然そこにはちゃんとのろしをあげる人がいるわけです。彼らはどんな生活しているんでしょうか。

山の頂上で，いつあがるか分からないのろしをひたすら待ち続ける仕事。万が一あがったとしても，自分ののろしに火をつけるだけ。う～ん、すっごい退屈そうですね。
モチベーションが保てそうにないです。そもそもそんな仕事したくない。でも兵士なら命令でやらされているのかも。あるいは１年のろし係りを勤めたら給料があがるとか，一階級昇進できるとかあるのかも。ありますよね、でないといくら命令でもだれもしないでしょう。

隊長「おまえ，来月からのろし番な！」
兵士「え、自分でありますか！」
隊長「そうだ。カラズラス山だ」
兵士「・・・・」
隊長「返事は！？」

なんてことがありそうです。そしたらさらにお話は広がっていきます。たとえば，のろし番が決まった兵士はこれからどうするでしょうか。親しい人にこのことを伝えるに違いありません。そして長い山篭りの前に休暇を取って思う存分遊ぶのかも。いやいや，実は誰にもしゃべらないかも。それには理由があって、それは・・・。とまぁいくらでも物語は膨らんでいくわけです。

いい本というのは、ひとつにはこういう空想を広げる余地がたくさんあることではないでしょうか。全部を書ききることはできません。人々の暮らしや習慣をどこまで書いて，

どこを書かずに置いて，読者の想像にまかせるか．書きすぎると想像の余地がなくなり，書きなさすぎると薄っぺらい物語になってしまいます。指輪物語の場合は，膨大な量の記述があるにもかかわらず，ぜんぜん書ききれていませんけど。途方もない世界観を感じます。とてつもなく深い，モリアの坑道のように。ドワーフたちはあの坑道をどうやって掘ったんでしょうか。あまりに深く掘りすぎたため，悪鬼を目覚めさせてしまったわけですが，最初に目撃したドワーフはどうなったんでしょう？

そうそう，この本の最後，追補編には巻末に中つ国の年表が載っています．これには物語が終わった後の出来事まで書かれています。これがまた淡々と起こったことだけを書いてあるだけなんですが（年表なのだからあたりまえ)、面白い。めちゃくちゃ空想が広がります。何度も読みました。本編より読んでます。あーまた読みたくなってきました。実は好きなのに本を買ってないんですよね。３０センチ近い分厚い本が３冊ですから，学生の私には無理でした。今なら買っちゃおうかな。その本は重いんです。重さで本がメリメリいいます。そんな本，見たことあります？あお向けに寝転がってバッと開いて読むことはお勧めできません。腕がもちません。あと本も壊れるかもしれませんね。

もしまだ読んだことがない人は是非挑戦してみてください。図書館にあります。すばらしい！ないと思ってました。しかも文庫ではなく分厚い３冊です。ハードルは高いですよ。特に最初の３０ページは飛ばしたほうがいいかもしれません。私は初めて読んだときここで力尽きました。ええ、一度挫折してます。読んだ人は私の部屋に読めたよーといいにきてくれると喜びます。これを読んでひとりでも多くの人が指輪物語を読んでくれることを願いつつ。